

## 御消息に忍ぶ晩年の親鸞聖人 (一)

鷺 山 樹 心

## 一、序にかへて

親鸞聖人全生涯に於ける晩年の栖は京都であつた。京都と云へば聖人にとつて、忘れがたいゆかりの土地であつたことは、その發心より在叡時代を経て、越後配流の三十五歳に至るまで住み馴れられたと云ふ事實に照して見て明らかなことではあるが、他面また既に六十有餘の老境であつた當時、京都以後の約二十年間にわたる在住の地であつた關東も亦いはゞ餘世を送るにふさはしい土地でなければならなかつたはずである。然るに事實は、多くの同法門侶達との深いえにし、換言すれば所謂復古的原始教團とも云ふべき美しい關係を形式上終結し、あまつさへ斷ちがたい恩愛の妻子とも拾餘箇國の境を距てた京の地をさして慄然旅立たれたのである。思ふに當時の聖人の年齢又は交通情况等諸般の事情より推して、そ

れ等關東の人達とは再びめぐり逢ふことすらおぼつかないやうな人間としての悲劇を、自ら求められるに至つた理由に就いては、こゝに輕々しい論定を下すことは許されない。關東出發の理由には學界に様々の説が林立してゐるが、未だ明確な資料もなく、それらは尙想像の範圍に止まるのではないかと思はれる。聖人の歸洛と云ふ事實を靜觀して先づ思ふことは、それは外的な諸條件に依るのではなくて、内面的な深い宗教的又は人間的な面からの切實な要求に基いたものであつたであらうと云ふより外ないやうである。聖人は關東出發後どのやうな経路で何時京の地を踏まれたか等に就いても説が一致して居ない。「高田正統傳」は貞永元年(西紀一二三二)坂東出發、路次の有縁を度しながら嘉禎元年(西紀一二三五)八月上旬入洛と述べてゐるが、「正統傳」そのものがその製作の性質から見て、偏にその説に依ることは危いこと

である。山田文照師は、現今聖人の關東出發もしくは歸洛の年時に就ては、何等確實な材料存せずと述べられ、参考として右の高田正統傳を掲げて置くとし、「それは聖人六十歳から六十四歳までの間であつたらうが、確實な斷定は下せない」と結んで居られる。歸洛後の聖人に就いて思ふとき、先づ日野氏の系であつたか否かと云ふ問題に出逢ふ。これは晩年の聖人の生活を考察する上に重要な問題であるが、自分は遺憾ながら肯否いづれとも決しかねてゐる。さて、聖人を迎へた當時の京都は、かの承久の兵亂の後約十年を経過したのであるから、若き頃の聖人の腫に映じて居た京洛の面影とは幾分その姿を異にしてゐたことであらう。かの傳繪には「聖人故郷に歸つて往事をおもふに、年々歳々夢のごとし幻の如し」とある。「よき人々」の姿も今は昔。あまつさへその餘流を傳へてゐる洛内外の念佛者すらもが、「一念多念なんどまふすあらそふこと」のみに明け暮れるなど、かくしてものみなは寂寥そのものの京の地に、爾來九十歳の終焉まで約三十年を、五條西洞院、或は岡崎、二條富小路と扶風馮翊とどこどこに移り住みつゝ、生活古と老齡と、變動する時の流れの中に、只ひたすらに眞眞の一道を歩まれた如くであるが、幸にも現存する當時の聖人の

消息類を根據として、その間のわが親鸞聖人の面影を忍びたいと、全く淺薄な智識を省ることもなく、憧憬の心やみがたいまゝに、この小論を成すに至つたわけである。

さて、こゝに聖人の消息とは、歸洛後の聖人に對して、關東の門侶よりもたらされた主として教法に關する質義に應へられた御返事が大部分であつて、その中には純然たる書簡形式をなすものと、法語的印象を受けるものとがあるが、いかなる事情の爲か、建長以前のものは極めて稀であり、——恐らくは散失したものと思はれるが——、それ等の内現存する眞蹟十一通を始め、總計四十幾通の消息類に基いて考察を進めて行きたいと思ふ。

註① 山田文昭師著「眞宗史稿」二八七頁參照

② 「眞宗史稿」二九二頁

③ 聖教全書二の七〇七頁

## 二、現存消息の概観

「血脈文集」の跋文に、「世傳言開祖親鸞聖人最後歸洛之時垂示之倭牘九十三通云」(徳川中期越後僧順崇編)とある。これによると當時消息の數は大體九十三通と傳へられてゐたことが知られるが、然し實際はどうであつた

およそ九十二通を認めてゐるが、これとても學根的根據はなく、おそらくは著者良空坊の想像であらう。現在學界

に認められてゐるのは四十三通である。現存の消息類は、從覺編の「末燈鈔」(内題―本願寺親鸞大師御己證―并邊州所々御消息等類聚鈔)。直弟子系

性信系の編輯と推定される「血脈文集」(富山  
大谷大學藏)。專空寫傳本。

寺藏賢心寫本。大谷大學藏專空寫傳本。善性編の「御消息集」伊勢專修寺藏善性筆御消息集。

等があり、以上の外に顯智書寫の「慈信坊善鸞義絶狀」

一通（專修寺藏）專空書寫の淨信坊宛一通（法雲寺藏）が見  
られ、二通は加へて東西兩本頭寺及び專參寺で存する

眞蹟十一通がある。その外に伊藤義賢氏はその著「親鸞

聖人古寫本御消息と色紙聖教」百四十頁に古寫本御消息

の發見を發表して居られるが、眞偽の程は決しかねる。

以上の各消息集は編輯にあたつてそれぞれの特徴を有し

てゐる。その中で「末燈鈔」が集録數最大であり、又そ

の編輯方針も明確である。即ち總通二十二通を先づその

年月を明記したものは年の順に、次に年の不明なものは

その月日順に配列してゐる。「御消息集」は、主として

慈信坊の異義や、造惡無碍 一念多念などの問題に關す

るものを収めて居り、これは聖人上洛後の關東に惹起し

「善性本御消息集」は諸佛等同、攝取不捨、俱同彌勒等の問題に關してゐて、法語集と云つた形をとつてゐるや

うである。次に「血脈文集」は、性信系の横會根門徒の手で編輯されて居り、題名より見ても、法然―親鸞―性

信の傳統血脈を示さうとする意圖のもとに集成されたこ

とは明白である。而して消息として最も整うた形式を具

へてゐるのは「末燈鈔」であるが、然し各消息の年代に

つては研究の餘地のあるものが多く、新しい研究に依

て年月順に配列すると、多くの移重が起つて来る。

とくに慕いては格厚眞隱曰が早くその著「末燈鈔」の石

は、各集の重複を去り、集ごとに編輯し、更に眞蹟消息

をも集録してゐる。以上述べた「顯智本」「專空本」「眞

「智本」「善性本」「眞蹟本」を綜合して編輯したものに、

中外出版社の「新選眞宗聖典」集録の「親鸞聖人御消

息」がある。その集録内容は先出の「御消息集」十八

通、「末燈鈔」二十二通、「血脈文集」五通、「善性集」

八通の中の重複を去り、計三十六通とし、それに眞蹟の

みで傳つてゐる五通及び、顯智書寫の一通（義絶狀）を加

へて、都合四十二通としたものである。その配列の方法

は「末燈鈔」の方針に倣ふとあるが、その方針に従つて見ると、この配列も亦決して完璧とは云へない。即ち消息の内容、閏曆の關係、著作との連關などから見て、その消息の順序を變更しなければならぬものが若干あるからである。今試みにこれを補正して見ると、大體次に現す表のやうな形になる。但しこれは識者の更に嚴密なる訂正を待たねばならぬことは云ふまでもない。さてこゝで、先づ年次推定の理由に就いて年次の順を追うて少しく述べて置きたい。

①三月二十八日わうごぜん宛(聖教金書二ノ七二四)の一通は、寛元元年「いやおむな讓狀」と關係があると認められるので、この狀も亦同年もしくは寛元二年のものと推定出来る。③五月五日かくしん尼宛(伊藤義賢著古寫本御消息と色紙聖教所收)古寫本に依れば「親鸞七十八歳」とあり建長二年である。先述の如くこれは眞僞決定したいが一應表に組んで置いた。⑤十二月二十六日附教忍坊宛(聖教金書二ノ六九八)の消息には、「常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰のきこえさふらふ云々」と見え、建長三年閏九月廿日の消息は「有念無念事」に就いての御已證がその内容をなし、この頃「有念無念」に就いての論が常陸の門侶間にあり、この消息も亦このことに論及されてゐるので建長

三年の十二月二十六日と推定する。⑥月日なし宛名なしの一通は、その内容から見て明法坊の往生のことや、明教坊上洛のことなどが、建長四年二月二十四日附宛名なしの消息と一致するので、建長四年と推定する。⑧十一月二十四日宛名不明の一通は、内容が⑥と「北郡の善證坊」のことなど同一であり、建長四年と推定する。⑨七月九日性信坊宛は、慈信坊の義絶に關係があり、内容が義絶の前年の模様と思はれるので建長七年と推定する。⑩九月二日念佛の人々御中宛、⑪九月二日附慈信坊宛⑬十一月九日慈信坊宛の三通も同じく内容から見ると義絶前年と推定すると建長七年となる。⑮慈信坊宛は日附の下に慈信坊の自筆と云はれる「同六月二十七日到來」「建長八年八月二十七日註之」とありこれを根據とし建長八年と推定され⑯性信坊宛も同一内容である故同年となる。⑰一月九日眞淨坊宛は内容が建長八年義絶後の状態と思はれるので正嘉元年の一月九日と推定する。家永三郎氏著「親鸞聖人行實」では建長八年の部として取扱はれてゐるが、この消息では、慈信坊に對せられる聖人の態度が明白であり、義絶前とするよりも義絶後の方が妥當であると思ふ。⑱九月七日性信坊宛は、内容(ことに袖書)より見て、鎌倉の訟訴のことも次第に落着いた様子が伺

はれ、これは前出消息⑦以後の状態であり正嘉元年九月七日と見るのが妥當であらう。家永氏は建長八年の部に收録してゐられる。②月日不明性信坊宛も、内容が鎌倉訟訴落着の報を、源藤四郎より聽かれた喜びに溢れて居り①と相前後するものと思はれる。③日月不明宛名不明のこの書狀は、慶信上書に對する御加筆であり、十月二十九日蓮位坊が慶信坊にあてた文と同封されたものであるから十月二十九日附となる。尙蓮位書狀の内容が、覺信坊の往生に關係して居り、④正元元年の消息に「かくしんばうふるとし、ごろかならず／＼さきだちてまたせ：」とあるものも參考して推定すると、正嘉元一二年が妥當

だと思はれる。⑤壬十月廿九日附たかたの入道宛は閏曆の關係、及び内容から正元元年に當る閏曆と見る。⑥十月二十一日性信坊宛には「十二光佛の御ことのやう：」とあり、これが「彌陀如來名號德」一篇を指すこと明らかである故、この一篇の書寫年次文應元年十二月二日に應じて、文應元年一二年の十月二十一日と推定する。⑦十一月十一日いまごせんのは、宛⑨十一月十二日ひたち人々のおん中宛の二通は、遺言の項で述べるが、文體内容が遺言の形式をなして居り、文字の難澁せる有様などから遺言狀と決定せられた橋川師の御研究に従つて、御入滅年次弘長二年の消息とする。

位順			干支	紀元	年號	月日	宛名	冒頭の言葉	年齢	著	作	收録の書名	備考
3	2	1											
庚戌	癸卯	乙未	甲午	一一八九四	文應二	六月九日	わうこせん	いやおむなのこと	64.63			六月十九日聖覺の著	拾眞一
一九一〇	一九〇三	一八九五	一八九四	嘉禎元	年次不明			ふみかきてまいら	71			唯信鈔を書寫涅槃經六十葉を書寫す	眞在寺
【建長二】	寛元元	寛元元	寛元元	三月二日	三月二日	三月二日	ナシ	みのかはりとらせ	71			仁治二年(六十九歳)唯信鈔書寫す	
五月五日	三月五日	三月五日	三月五日	三月五日	三月五日	三月五日	ナシ	めしつかう	75.74			三月十四日唯信鈔を	
五月五日	二月五日	二月五日	二月五日	二月五日	二月五日	二月五日	ナシ	御文こまかに承り	76			信鈔文類を著す	
五月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	ナシ	候先に……	78			淨土和讃、高僧和讃各一帖を書す	
五月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	一月五日	ナシ	御文こまかに承り	78			自著唯信鈔文意を書寫す(二月二十一日)	別氏發見

15	14	13	12	11	10	9		8	7	6	5	4
丙辰	丙辰	乙卯	乙卯	乙卯	乙卯	乙卯	甲寅	壬子	壬子	壬子	辛亥	辛亥
一九一六【建長八】	一九一六 建長八	一九一五【建長七】	一九一五 建長七	一九一五【建長七】	一九一五【建長七】	一九一五【建長七】	一九一四 建長六	一九一二【建長四】	一九一二 建長四	一九一二【建長四】	一九一一【建長三】	一九一一 建長三
五月廿日	五月廿日	五月九日	十月三日	九月二日	九月二日	七月九日		十二月廿四日	二月廿四日	ナシ	十二月廿日	閏九月廿日
慈信	覺信	慈信	ナシ	慈信	念佛の人々	性信		ナシ	ナシ	ナシ	教忍	ナシ
來迎は諸行往生にあり自力の行者なるが故に 護念坊のたよりに教忍御坊より…… 御ふみたびくま御覽せざるや 方々よりの御こゝろざしものども…… なによりも聖教のをしへもしらず…… 六月一日の御ふみくはしくみさふらひぬ…… まづよろずの佛菩薩をかるしめ…… ふみかきてまいらせさふらふ…… かさまの念佛者の疑ひとはれたること…… 九月二十七日の御ふみくはしく…… 尊信坊京ちかくなられて候こそ…… おほせられたることくはしくきゝてさふらふ……												
84	84	83	83	83	83	83	82	80	80	80	79	79
十字名號、八字名號、六字名號を書す	願一篇を書寫す	十一月三十日皇太子聖德奉讀を書す		生文類を書す、八月二十七日愚禿鈔二卷を書す	聚鈔を著す	七月十四日淨土文類	六月二日尊號眞像銘文一卷を著す(略本)			三月淨土文類聚鈔を著す		
二月唯信鈔書寫 九月十六日 八日後世物語書寫 十一月十六日 八日二河白道延書々寫す 四月廿三日 隆寛の念多念分別事を書寫す 四月二十六日 淨土高僧兩和讃を再治す 五月二十三日 源空の消息を書寫す 六月自著、尊號眞像銘文を書寫す (某月八日書工法眼をして自影を寫さしむ……安城御影在西本願寺) 年次不明、皇太子聖德奉讀和讃を書寫す 三月廿三日入出二門偈頌一卷、三月廿四日唯信鈔文意を書寫す												
顯智寫本	拾眞六	御消六	血末一二	眞末	御消五	御消四	御消二	末一六	末二〇	末一九	御消三	末一

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
壬戌	庚申 (辛酉)	庚申	己未	戊午	戊午 (丁巳)	丁巳	丁巳	丁巳	丁巳	丁巳	丁巳	丙辰
一九二二	(一九二〇) (一九二一)	一九二〇	一九一九	一九一八	(一九一七) (一九一八)	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一六
【弘長二】	【文應元】 (二)	文應元	【正元元】	正嘉二	【正嘉元】 (二)	【正嘉元】	正嘉元	正嘉元	【正嘉元】	正嘉元	【正嘉元】	建長八
十月十日	十月廿二日	十月廿三日	閏十月九日	三月十四日	【十月九日】	ナシ	十月十日	十月十日	九月七日	閏三月三日 (二)	一月九日	五月廿日
いませ んのはこせ	唯信	乗信	たかた の入道	ナシ	【慶信】	性信	眞佛	性信	性信	ナシ	眞淨	性信
このおんふみども のようくはしく……	さては念佛のあひ だのこによりて	また五説といふは よろずの經を……	武藏よりしむの入 道どの……	信心をえたる人は かならず……	これは經の文なり 華嚴經に……	くだらせたまひて のちなにごとかさ ふらふ……	南無阿彌陀佛と なへての上に……	自然といふは自は おのづからと……	閏十月一日の御文 たしかに見候……	なによりもござこ とし老少男女おほ くの人……	てさふらふ十二光 佛の……	ひたちの人々の御 なかへこのふみを ……
90	89.88	88	87	86	86.85	85	85	85	85	85	85	84
十一月廿九日往相廻 向、還相廻向文類を 書す	十一月十一日唯信鈔文 意を著す二月九日夢 告の和讃あり	二月三十日大日本栗 散王聖德太子奉讃和 讃を書す	六月四日淨土文類聚 鈔を書す	六月二十八日尊號眞 像銘文を書す	六月二十八日尊號眞 像銘文を書す	八月六日一念多念證 文を書寫す	八月六日一念多念證 文を書寫す	五月十一日上宮太子 御記を書寫す	三月二日淨土三經往生文類 聚二種廻向文を書寫す	一月二十七日唯信鈔 文意(自著)を書寫す	十月十三日西方指南鈔上巻 末、同月十四日中巻末、十 一月八日下巻末を書寫す	十月十三日西方指南鈔上巻 末、同月十四日中巻末、十 一月八日下巻末を書寫す
眞	御消九	末六	眞	末五	眞末一四	御消八	末四	善血末三	血四	末八	御消七	血二

29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
壬戌 一九二二【弘長二】	(以下年次不明)											
十二月五日	二月三日	二月九日	二月廿五日	二月廿五日	五月五日	五月五日	七月十五日	十月六日	十月廿八日	十二月六日	十二月廿五日	十二月廿六日
のひたち人々 のおん中々	ナシ	慶西	ナシ	淨信	けうめう	じゃうしん	有阿彌陀佛	しんぶつ	淨信	專信	ナシ	隨信
このいまこそんの はのたのむかたの もなくのひうま 何ごとよりは如來 の御本願のひうま らせたまひて 諸佛稱名の願とま ふし諸佛の願とま ふし諸佛の願とま 安樂淨土に入りは つれば大涅槃をさ とることも 往生は何事も 凡夫のはからひな らず 御文くはしくうけ 給はり候さては御 不審の候はしくう 御ふみくはしくう け給候ぬさてはご ほうもん候念佛の 尋仰られ候念佛の 不審のこと たづねおぼせられ は候攝取不捨の事 はたづねおぼせられ て候事返々めであ う候 おほせ候ところの 往生の業因は 他力のなかに自力 とまふすことは 御たづねさふらふ ことは彌陀他力廻 向の	90											

眞	御消一	御消三	血消十	末廿一	末廿二	末九	末十	末十二	眞末十三	眞末十五	善七	末十七	末十八
---	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	------	------	----	-----	-----





の慈信坊の手紙を入手されたのが、十一月九日（文と錢は同便）であり、この返信は同日中に認められたことが伺はれ、その間關東京都に約一ヶ月半を要した譯である。かくして書信の片道に要した日數を大體算出して見たのであるが、一概に關東と云つても、その地方々々に依つて距離の差があり、通路の差違、天候の都合もあることであるが、早ければ約一ヶ月遅ければ一ヶ月半にも及ぶ長期日を要したのである。それでは、かうした消息はいかなる方法で聖人と門侶達の間に交されたのであらうか。性信坊宛の消息を見ると「この源藤四郎殿におもはざるにあひまいらせてさふらふ。便のうれしさにまふしさふらふ。」源藤四郎殿の便にうれしうてまふしさふらふ。」とあり、この場合に依れば、源藤四郎との偶然なめぐり逢を心から喜びながら、早速性信坊への消息をことづけられた聖人の姿が目につぶが、このやうに時折の人のたよりに託してもたらされたとおぼしいものがあり、又十二月二十六日教忍坊への返事には、「護念坊のたよりに教忍の御坊より錢二百文御ころさしものたまはりてさふらふ」とあり、護念坊が上洛の折に託した教忍坊の錢二百文や志のものなどに對する謝意の御返信は、恐らく護念坊下國の際に、再び彼によつて教忍坊のもとへ送ら

れたものであらうと思はれる。十二月十五日眞佛坊への書信は、「このゑん佛ばうくだられて候」とあり、これは「ゑん佛坊」によつて送られたものであることが伺はれる。この場合の「このゑん佛ばう」の「この」は、聖人の書簡をもつて眞佛坊のもとに行つた所謂使者としてのゑん佛坊を指す語と見るべきであらう。

以上のやうな場合は、特別の人に托したものの如くであるが、この外に郵子即ち飛脚に托したものもあつたであらうかと想像せられる。

註①	眞宗聖教全書二の六九六	⑤	同	七〇五
②	同	⑥	同	七一〇
③	同	⑦	同	六九八
④	同	⑧	同	七二六

#### 四、京に於ける聖人の生活

晩年歸洛後の聖人の生活は、どうして維持されたのであらうか。京都に於ける聖人には、直接の民衆教化と云ふことも行はれたらしい形蹟がない。もとより斷言は憚るが、今消息に依つて聖人の經濟的生活を眺めたい。建長四年二月廿四日の消息に、「明教坊ののぼられてさふらふことありがたきことにてさふらふ。かたがたの御こゝろさしまふしつくしがたくさふらふ」とある。思ふに

これは、聖人のもとに參るべく上洛する明教坊に、その土地の聖人有縁の人々が依頼した所謂志のものに對する感謝の表現であり、同じ消息の追記と思はれる部分に、「かたふよりの御こゝろさしものども、かすのまゝにたしかにたまはり候」と重ねて述べられてゐる。十一月九日慈信坊御返事には、「さては御こゝろさしの錢五貫文十一月九日にたまはりて候」と見え、十一月廿五日附消息には、「錢貳拾貫文慥々給候」とあり、又年次不詳のものに、「人々の御こゝろさしたしかにたまはりてさふらふ」など見出すことが出来るが、この「貫」「文」の貨幣價值は如何なる程度のものであつたであらうか。平家物語の卷一「妓王」の條に、「母とぢにもよき屋をつくつてとらせ、毎月百石百貫をおくられければ」「さる程に毎月に送られつる百石百貫をも、今はとゞめられて」等見受けられるが、米百石の價としての錢百貫文であるのか、米百石と錢百貫文であるのか判然とせず、貨幣價值を知る材料としては直接的でない。「東鑑」に依ると、建長五年の項に、「是歲九月十一日利賣の直法を定め炭一駄代百文、薪三十束一把別百文、萱木八束代五十文、藁八束代五十文、糠一駄代五十文、俵一文とす。右は近年高直に過るにより商人に下知す」とあ

り、物價上昇の様子が見受けられるのである。之は前年即ち建長四年に襲來した飢饉の影響と見るべく、「如是院年代記」には「歲大に飢米一升代百錢」と記録されて居る。飢饉などに依る急劇な物價の變動が伺はれ、これ等の率では錢一貫文は米一斗の割になり、寛喜二年六月二十四日の「米一石錢一貫文に定む」に比較すれば、實に十分の一の貨幣價值の下落である。これを又「仁治二年米一石代三百文」に對比すると多大の變動があるわけであつて、一石を一貫文として聖人に贈られた五貫文乃至貳拾貫文の價值を換算することは必ずしも當を得たことと云へまい。いづれにしても五貫文乃至貳拾貫文は少額ではなかつたやうであるが、その價值は時勢の變動と共に上下してをり、一定したものでなかつたと見るべきであらう。さて門侶達よりの「志の錢」は個人の出資に依るものもあつたであらうが、十二月廿六日教忍坊の文には、「さきに念佛のすゝめものかたがたの御なかよりとて、たしかにたまはりてさふらひき」とある。「念佛のすゝめもの」とあるから、所謂念佛講で多數の門侶達より集められたものが、聖人のもとに贈られたことが伺はれる。先の眞佛坊の錢貳拾貫文等も、そのやうな性質のものではなかつたかと思はれる。尙この消息は他の

「志の錢」「志のもの」に關する、部面に比較して少しく書き方が變つてゐる。即ち「何ごとも專信坊のしばらくゐたらんとさふらへば、そのときまふしさふらふべし。穴賢々々」と結ばれて居り、次に別行に改めて、「錢貳拾貫文、慥々承候穴賢々々」とあつて、一見別に貳拾貫文に對する贈られる「人」としての感情の表現は無く、只「慥々」受取つたと云ふ受領證のやうである。その形式から推測して、おそらくは眞佛坊個人の出資ではなく、所謂「念佛のすゝめのもの」等多數の人々の合資と云ふ性質のもので、眞佛坊はその代表者と成つてゐたのではなかつたかと思はれるのである。しかもこの消息は眞佛坊宛ではあるが、彼自身に與へられたものではなく、云はゞ大衆を對象とされた消息と見るのが妥當のやうに考へられる。これに就いて服部之總氏は、「この眞佛の二十貫は、とびはなれて巨額である」とし、「晩年に至りむすめ(いやおむ)を賣る程に窮迫してはゐなかつたことを論證するの熱心である學僧山邊習學氏の如きは、『眞佛坊のは二十貫文とあるから、米一石一貫文といふことから考へると、當時の物價から比較して大變な量である』と云はれるが、當の親鸞は貧しい常陸の同法たちからよせられる二百文三百文に對しては深い謝意を伸べ

てゐながら、この眞佛の二十貫文に對しては特にそれにあたひするたらしい御禮を書いてゐない。それはどうであらうとも、眞佛の二十貫は二百文三百文と比較を絶した大金であり、これを平氣で出し得るものは、親鸞が、『このよのならひにて念佛をさまたげむ人』である<sup>⑧</sup>と見た『そのところの領家地頭名主のやうあることにてさふらはめ』に相當する」とし、「米二十石に相當する錢二十貫文をおくりつけた特權身分の弟子眞佛に對し、親鸞は百七十字の本分に一片の愛情も開いてをらず、追伸の一行にしたところが、『御こゝろざしのもの』もなく、いきなりむきだしで『錢二十貫文』とぶつつけてゐるのである」と論述してゐられるが、これはあくまで聖人をして無產者農民の味方であつた左證とするための見方であつて少なからぬ無理を感じる。そしてその消息中の引用個處に對する見方も獨斷に過ぎるやうに思はれる。持てる者持たざる者と同法の中に區別があり、それを強く意識して、その一方のみに愛情を示し、他方には冷酷であつたと云ふやうな偏執は、決して聖人の個性ではなく、教法の敵に對しては人間の感情を超えるばかりに峻烈であつた外、消息全體に現れる同法への態度は純粹であると共におほらかである。それはそれとして、今

「志のもの」に關係のある文例を検討して見ると、「御こゝろざしのもの」と「御こゝろざしの錢」とに使ひ分けられてゐることに着目せられる。もつとも、多數の人に對する場合は一々の明記はないにしても、聖人は二百文三百文にも必ず受領の金額を明記して、一見几帳面に慎まれた如くであり、又消息全般を通じて見て、その返信を長く放任されたと思はれるものは一通も見あたらず、着狀の當日筆を執つて返信を認められたとも思はれるものも少なくないことに就いては既に述べたが、これ等のところになにかしら細密な心づかひと一徹した几帳面さの一面がそのおほらかな人格の中に存在していたように思はれるが、この様な觀點に立つとき、「御こゝろざしのもの」とのみ見えて、別にその他の書添のないものは、それが金錢以外の生活の必需品かなにかであつたのではあるまいかと思ふのである。例へば、「護念坊のたよりに教忍の御坊より錢二百文御こゝろざしのものたまはりてさふらふ」とあるが、これなど前述の見方からすると、「御こゝろざしの錢五貫文」などとあるに照して、同じく「御こゝろざしの錢二百文」と見るべきではなく、どうしても「錢二百文」と「御こゝろざしのもの」であつて、教忍坊は護念坊に托して錢二百文と、その外に何かのおくりものを添へて差上げたと思なければ

なるまい。建長八年五月廿八日の覺信坊宛の消息を見ると、「專信坊の京ちかくなられて候こそ、たのもしくおぼへ候へ。又御こゝろざしのぜに三百文、たしかに／＼かしこまりてたまはり候」とある。三百文の錢の前に身を正して、いかに同法の志をしみつゝと有難く偲ばれたことか、かうして聖人の生活の大部分は、これ等門侶同法達の「志のものと」に依つて擁護されながら、さゝやかな炊煙を漂されたものではあるまいか。

註① 眞宗聖教全書二の六八九

② 同 七〇五

③ 一本には日附の次に眞佛坊御返事とあり。たゞし眞佛宛には非じ。

④ 眞宗聖教全書二の七二四

⑤ 群書類從第二十卷所收、如是院住持某の著

⑥ 百鍊抄第十三(國史大系第十一卷所收)寛喜二年六月廿四日「以錢一貫文司被直米一石之由被下宣旨」

⑦ 教忍坊の二百文、覺信坊の三百文等

⑧ 眞宗聖教全書二の六九八

⑨ 「國土」一九四八年第六號二八頁

⑩ 「わが親鸞」二六八頁

⑪ 御消息第九通「念佛の人々御中へ」眞宗聖教全書二の七〇二

⑫ 右同。

⑬ 「念佛をさまたげむ人はそのところの領家地頭名主のやうあることにてこそさふらはめ。とかくまふすべきにあらず云々」

⑭ 眞宗聖教全書二の六九八

⑮ 同

⑯ 眞宗聖教全書二の六九八

⑰ 同

六七一